

「大田の工匠百人」

大田区ものづくり優秀技能者表彰
 彰「大田の工匠百人」の表彰式が、六月十四日に行われました。
 「大田の工匠百人」とは、平成二十年から二十四年までの五年間で区内の企業で活躍されている職人を表彰し、その技能の継承や後継者の育成を目的としたものです。最終年度となる平成二十四年度は十名の方が受賞され、蒲田西地区からは、荒木志郎さん、佐久間正巳さんの二名が受賞されましたので、ご紹介させていただきます。



荒木 志郎さん
 大田区新蒲田三丁目にある荒木さんの亜細亜精機を訪ね、氏の半生を振り返っていただいた。荒木さんは昭和十六年生まれ、七十二年、出雲大社で有名な島根県出雲市のご出身。中学卒業後、

金型製作の達人 荒木 志郎さん

学校の先生の紹介で、元来ものづくりが好きだったことと東京への憧れもあってこの道に入った。以後五十五年、紆余曲折はあったが健康に恵まれ、ひとすじに夢中でやってきた。工場内には数台の機械が所狭しと並んでいて、それを製品の種類や大きさにより使い分けるのである。荒木さんは、大は二五〇ミリから小は二ミリのプラスチック製品を作るために使う金型を設計・製作する。この金型から生まれる製品は、電化部品、自動部品、ロボット部品等弱電から工業部品まで多種多様であり、併せて高度な精密さを要求されるが、試作から加工まで一貫して対応するので顧客の様々なニーズに対応される。プラスチック部材に応じ、独自の工夫を凝らしての金型製作技術が達人と評価されに至った。ご多分にもれず仕事の環境は厳しいが、自信をもって良い仕事をすれば、将来も明るい。ただし、職人不足は深刻な問題であり、後継を期待した息子さんも、バブル経済崩壊後を境に仕事が減ったため、いまは海外で部品造りに従事している。昨年高齢のため一人退職し、現在二人で工場を運営しているが、親としては息子さんが跡を継いでくれることを願っている。



佐久間 正巳さん
 西蒲田三丁目製作所を営む佐久間さんは、本紙第四十五号がまちの顔で、昨年放送のNHK朝の連続テレビ小説「梅ちゃん先生」で旋盤指導をされていると、ご紹介した方です。父・佐久間幹夫さんも平成二十年の初代の工匠として選ばれ、親子二代での表彰となりました。正巳さんは、受賞コメントで、「父親から受け継いだ技術を後世まで残していきたい」と話されています。この道二十八年で、父・幹夫さんからの技術を受け継ぎ、また自身も新しい技術を取り入れながら日々精進されています。近年では中学生の職場体験の受入れなどをされています。今日も多方面に活躍されています。

元気で快活な荒木さんにお話を伺いましたが、今後も一層ご活躍されることとお見受けいたしました。(取材 鎌田委員)

ベンチレース・マシンングによる 金属加工の達人 佐久間 正巳さん

編集後記

地域情報紙「かまにし17」は今号で第五十号の発行となりました。これもご尽力いただいている地域の方と、読者の皆様に支えられてきたおかげです。ありがとうございます。また、前号から「かまにし17」のホームページにカラー写真を掲載しております。紙面の白黒写真だけでは伝えきれなかった、色彩豊かな写真等をご紹介しておりますので、この機会にホームページもぜひご覧ください。

かまにし17をお読みいただき、ありがとうございます。情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などございましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所
 大田区西蒲田七十一番地
 (三七三三)四七八五

蒲田西特別出張所管内

人口	男	31,654人
	女	29,142人
	計	60,796人
世帯	33,566世帯	

平成25年11月1日現在

平成25年12月1日発行

かまにし

第50号

発行 地域力推進蒲田西地区委員会
 編集 地域情報紙編集委員会

わがまちの顔

ファイギュアスケート一筋



現役時代の横谷さん

横谷 花絵さん

人として、横谷さん一人が出場し五位となりました。その後のエキジビションでシャンソンの曲のつて、バラの花を手にし優雅に楽しそうに滑っている姿を見て母親の恵子さんは「今まで見守って来てよかった」と思ったそうです。そこには家族が一同となつて応援してきた達成感が感じられました。



表彰台で笑顔の横谷さん(中央)

東矢口三丁目にお住まいの横谷花絵さんは三歳からファイギュアスケートを始めて、現在は明治神宮外苑アイススケート場で指導者として活躍されています。スケート歴は三十二年です。お年玉でスケート靴を買ってもらったのがきっかけで幼稚園入園と同時にスケート教室へ通い始めました。めきめきと腕をあげ、一九九四年全日本ジュニア優勝、世界ジュニア六位、一九九五年以降シニアの大会でも活躍。全日本選手権優勝、スケート・カナダ、NHK杯で二位入賞、世界選手権にも出場されました。一九九六年パリで開催された第一回「グランプリファイナル」では日本

現役を退いてからファイギュアスケートのコーチとして幼稚園児から大学生までの生徒達十五人と高齢者の方の個人レッスンなどを指導しています。朝練習・午後の練習と忙しい日々を過ごしています。教えるの中に、秋篠宮家の佳子様がおられ、小学校二年生の時から二年間にわたって指導されました。

横谷花絵さんの主な経歴

1993-94	全日本ジュニア選手権	優勝
	世界ジュニア選手権	6位
1994-95	第63回全日本選手権	優勝
	世界フィギュア選手権	10位
1995-96	スケート・カナダ	2位
	NHK杯	2位
	第64回全日本選手権	2位
	グランプリファイナル	5位
	世界フィギュア選手権	10位

(取材 久保村、佐藤委員)

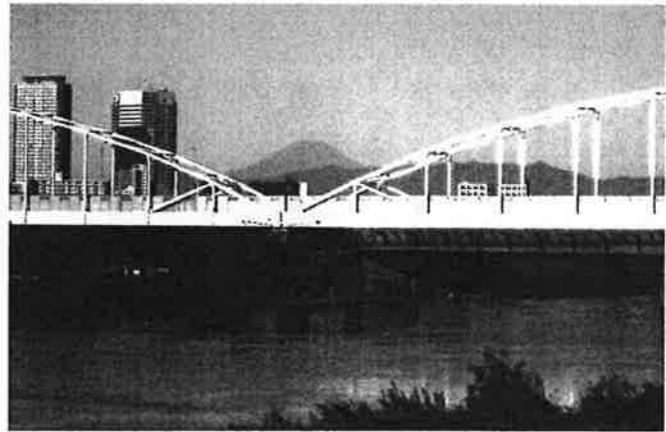
世界遺産 富士山とわが町

あたたまを雲の上に出し
四方の山を見おろして
かみなりさまを下に聞く
富士は日本一の山

これはだれもが知っている「ふじの山」という小学唱歌です。作曲者是不詳ですが、明治、大正期の児童文学者である巖谷小波の作詞によるもので、一九一一年（明治四十四）年に世に出て以来、現在までずっと歌い継がれてきています。小学三年生で習う歌だそうですが、今でもそらんじて歌うことのできるという人が多いのではないのでしょうか。

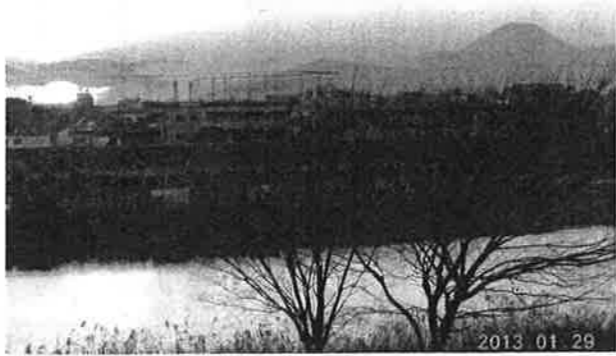
今年の六月、富士山がユネスコの「世界文化遺産」に登録されました。正式名称は「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」で、古来から伝わる山岳信仰の対象としての富士山、また浮世絵など芸術の源泉としての富士山の価値が評価されたものです。実際、富士山ほど私たちの心に深く根を下ろしている存在はないのではないのでしょうか。日本の象徴と言われる所以です。高尚な芸術作品はもとより、私たちに身近な紙幣の図柄にもなっています。現在流通している

紙幣では千円札に使われていますが、これは富士五湖の一つ、本栖湖から撮った逆さ富士だと言われています。



多摩川大橋と川崎の高層ビル群と富士山

また、家風呂の普及とともに銭湯は少なくなってきましたが、かつては庶民の社交の場であり、憩いの場でもありました。東京周辺では銭湯のペンキ絵にもよく富士山が描かれています。神田猿樂町の「キカ



多摩川土手より撮影（下丸子地区）

上を走るバス停の停留所も富士見橋となっています。

また、東急多摩川駅近くの田園調布一丁目十二番と三十番の間に富士見坂という曲がりくねった急坂があります。大正末期頃から行われた耕地整理によって出来た坂道で、ここから富士山がよく見えたということから名付けられたようです。現在、坂の上には富士見会館という区の施設が建っています。

大田区全体を見渡すと、東邦医大通りを大森駅方面に向かって行くと、富士見橋という名前の橋が内川に架かっています。北馬込に水源を發する内川は、かつては大森町商店街（旧山谷通り）の北側をほぼ通りと並行して流れ、京急大森町駅を横切るようにして東海道の内川橋へと流れていました。大正五年から六年にかけて行われた耕地整理の結果、現在の流路となり、富士見橋はそれ以降に架けられたものです。内川の河口はふるさとの浜辺公園となっています。現在この富士見橋が大森西一、二、三、四丁目の町境となっています。

この坂を下りて多摩川線の踏切を渡った右側の台地（古墳）の上に浅間神社があります。八百年ほど前の鎌倉時代の創建と伝えられています。浅間神社の祭神は木花咲耶姫命（このはなさくやひめのみこと）で富士山信仰と深く結びついています。この浅間神社は四百年余り昔に開削された六郷用水とも因縁があります。開削工事は道塚村からスタートし、上流に向かって掘り進められていきましたが、家康の命を受けて工事を担当した駿河国富士郡出身の代官の小泉次太夫は初め、浅間神社近くの多摩川を取水口にするつもりでした。ところが浅間神社でまどろんでいたところ、彼の夢枕に女神が現れ、ここを迂回するようにと告げられました。そのために、迂回してさらに上流の和泉まで掘り進み、取入口を造ったと言われています。

「イ湯」が一九一二年（大正元）年に壁に富士山を描いたのが最初で、末広りの富士山が縁起がいいと大評判になり広まったということ。描いてはいけないのは「夕日」と「紅葉」と「猿」で、それぞれ「沈む」、「散る」、「客が去る」を連想させるという縁起担ぎだそうです。

「富士市」「富士見町」「富士見峠」など、富士と名のついた地名は、静岡県や関東甲信地方を中心にその数は枚挙にいとまがないほどです。また、美しい山容が富士山と似ていたり、その地方の代表的な山であることからつけられた郷土富士と呼ばれる山が全国に三百二十一座も存在しているそうです。有名なところでは蝦夷富士（羊蹄山）、津軽富士（岩木山）、南部富士（岩手山）、讃岐富士（飯野山）、伯耆富士（大山）、薩摩富士（開聞岳）などがあり、東京にも八丈富士などがあります。名前を聞いただけでその円錐状の美しい山容が思い浮かびます。

さて、それでは私たちの蒲田西地区に富士がつく地名はないかと探してみると、新蒲田三丁目（旧、道塚）に富士見通り商店会というのがありました。現在の富士見通り商店会は一筋の通りではなく、南北に走る六郷土手行きのバス通りとそれに直交して東西に伸びる通りなどから構成

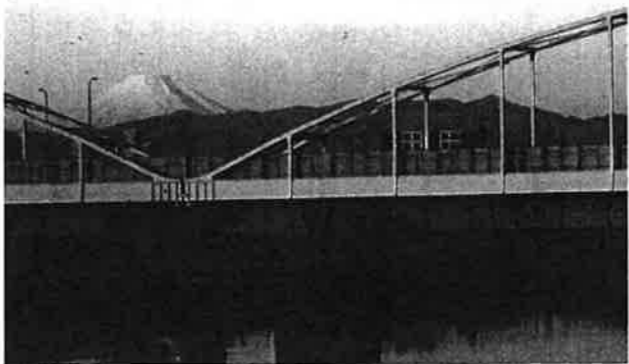
区内にはほかにも大森西二丁目や中馬込二丁目などにも浅間神社があり、かつては富士登山をする前に当社に参り、道中の安全を祈願したようです。

世界遺産登録の大きな要因にもなっています。富士山は古くから信仰の対象だったため各地に富士講が組織され、また人工的に築いた富士塚が作られました。第一京浜国道（東海道）沿いの品川神社にある富士塚は有名で、ここから見る東（海）側の眺望は素晴らしいものですが、区内にも富士山があります。羽田神社の富士塚ですが、大田区指定文化財になっていて羽田富士とも呼ばれています。天保四〇五（一八三三〜四）年建造説と明治十五（一八八二）年建造説がありますが、登山道が作られていて頂上には浅間神社、狛犬、鳥居が建てられています。交通手段が整っていない当時の、江戸から歩いて富士山に登る人は往復するのに十泊も要したそうです。そのため、江戸後期以降、実際に富士山に登ることができない人のために、富士山を模してつくった人工の小山を築くことが流行したようです。かつて穴守稲荷が現在の空港内に鎮座していたときには、そこにも富士塚がありました。現在区内ではこの羽田神社にあるだけです。また、富士講の

されていますが、元々は東西に伸びている通りを富士見通りと呼んでいました。この通りの西正面に富士山が望めたことから名付けられたそうです。いつごろ付けられた名前なのか商店会を訪ねて聞いて回りましたが、もう代が変わっていてわからないうようです。昭和二十五、六年頃ではないかということですから、六十年以上は経っていることになりそうです。かつてこの通りの突き当たりには昭和電工のグラウンドがあり、更地になっていました。ある商店の六十代のご主人の話では、「子供の頃は部屋に寝転がって富士山を眺めたものだ」と、当時を懐かしがっていました。グラウンド跡には現在トミンタワーと呼ばれる高層マンションが建っています。

多摩川の土手沿いのマンションに住んでいる人は、毎日富士山の眺望を楽しんでいるのではないかと思われ、三十年近く前に建てられた芙蓉ハイツに住んでいる方に聞いてみました。すると「富士山の素晴らしい眺望が気に入って買ったのに、今では対岸の川崎側に超高層ビルが建ったせいで全く見えなくなりました」と嘆いていました。なかには富士山の眺望を求めて下丸子地区に引っ越してしまっただけの人もあるということです。

碑は六郷神社や古川薬師（安養寺）などにも残っています。



真っ白な雪をかぶった富士山

最後に、蒲田西地区からの富士山眺望のお勧めスポットとしては、やはり多摩川の土手をあげたいと思います。早朝から午前中がとくにお勧めですが、これから冬場にかけては、真っ白な雪を頂いた富士山を拝むことができません。きっとその優美さを中心に奪われてしまうことでしょう。散歩コースに加えてみてはいかがでしょうか。

（取材 鎌田、多田委員）